

マラマッド文学における視覚の位置づけ—そのユダヤ的特質を巡って

前田 譲治

要約

マラマッド文学における登場人物は、視覚情報に依存することなく行動するタイプと、視覚情報に強く依拠しつつ行動するタイプとに鮮明に二分されている。前者はユダヤ的な色彩が相対的に濃厚な人々として描かれる傾向にあり、対照的に後者は非ユダヤ的な色彩が相対的に強い人々として描かれる頻度が高い。同時に、前者の行動様式が後者のものに勝るあり方が描かれるケースも多い。現実に関心を向けると、複数の研究者が一致して指摘するとおり、アメリカ人は視覚で把握できる具象物に価値を見出す傾向が極めて強い。他方、ユダヤ系は抽象志向が顕著で、視覚情報を重視する姿勢とは無縁であることを多くの論者が一様に指摘している。以上の点から、作者のユダヤ人としての自意識と、ユダヤが安易な Americanization に流される姿勢を批判する感性とが、マラマッド文学の作品構造の方向性を支配していると結論付けた。

キーワード

具象、抽象、*The Natural*, *The Assistant*, *A New Life*, “The Lady of the Lake,” “The First Seven Years”

Introduction

Bernard Malamud 文学においては、視覚によって実相を把握することが容易な具象物に対して登場人物達が示す反応が、極端に異なっている作品が多い。同じく、視覚では実相が捉えられない抽象的事象に対しても、登場人物が対照的な姿勢を示す場合が多く作品に見受けられる。以上のような、マラマッド文学に顕著に見られる、登場人物の描き分けに特に焦点を当て、さらに、各々の登場人物に対する作者の描写姿勢の一貫性を明確化することにより、マラマッド文学の全体的構造を明示することを本稿の目的とする。次いで、マラマッド文学の全体的構造が、作者の民族性とのように照応しているのかを、複数のユダヤ文化論とアメリカ文化論の援用を通して明らかにしたい。以上の作業を通して、最終的にはマラマッド文学のユダヤ的特質の一端を明示することを本稿の目的とする。

I

The Natural の主人公、大リーグ選手である Roy Hobbs は、Memo Paris に魅了され続けている。メモは “mother of evil and death” と評価され、“lovelessness” を最大の特徴とする女性であり (Alter 88)、ロイの恋心に全く感応しない。それゆえ、ロイがメモに魅了され続けるあり方は極めて理不尽と映る。このようなロイの心境が生じるのは、ロイが彼女の美しい容姿に囚われ、性欲を刺激され続けるためだ (173-74)。他方、母性的慈愛が横溢し、ロイに精神的安息を提供しうる女性、Iris Lemon はロイに真摯な情愛を示す。しかし、彼女がロイの興味を惹くことは最後に至るまでない。なぜならば、彼女は体型が華奢ではなく、そのような容貌を致命的瑕疵とロイが認識するからだ (145)。作品終末において、野球の試合中にロイが自らの打球により、スタンドで観戦中のアイリスを負傷させた際、アイリスを介抱するロイに彼女は、彼の子を宿している事実を告げる。その際のロイは彼女に押さえがたい情愛を示し、アイリスに対する彼の評価に根本的変化が生じたかのように見える。しかし、その直前の、“Roy turned to her [Iris] trying to keep in mind that she was a grandmother but when he scanned the fine shape of her body, he couldn't” (219). という一節に注意したい。つまり、アイリスの体型がロイの嗜好に視覚的に背かない点を実感した点が、彼女へのロイの評価が急転する要因となっている。他方、その場面において、表面的には愛情を露呈するロイを、アイリスは以下のとおり認識している。

She [Iris] took his [Roy's] head in her hands and drew it to her bosom. How like the one who jumped me in the park that night he looks, she thought, and to drive the thought away pressed his head deeper into her breasts, thinking, this will be different. (219)

上記引用でアイリスが言及している人物とは、過去に彼女を陵辱し、私生児の出産に至らせた男性である。つまりアイリスは、情愛を示すロイに、異性の外見への感応と不可分の関係にある lust に駆られて行動した男性の面影を直感的に察知している。このアイリスの認識の正当性を裏付けるかのように、ロイがアイリスの負傷を試合終了後に案ずることは、ついぞない。作品冒頭で確認できる、外見を基準として女性を評価するロイの姿勢 (8-9) は、15年の歳月を経た作品終末に至るまで持続している。また、ロイには、慈愛という抽象的事象を評価する視点が一貫して不在であり、視覚で容易に把握できる外面性に徹頭徹尾、囚われている。ここで、ロイとアメリカにおける主潮的価値観との関係を考えてみたい。

Earl Wasserman は野球がアメリカ精神と調和し、アメリカ人にとって必要不可欠な存在であると指摘している (45)。その野球の世界にこそ、ロイは至高の安住の地を見出している。さらに、ロイは、“the perfect embodiment of the American Dream” (Hershinow 16) と評されている。つまり、

ロイはアメリカ精神を形象化した人物として登場している。さらに、ロイは父親から野球の投球術に関する実務的な教育を受けている (14, 26)。しかし、教養教育とロイとが無縁であった事実を、Harriet Bird から Homer に関して尋ねられた際の、以下のロイの滑稽な反応は物語る。

Try as he [Roy] would he could only think of four bases and not a book. His head spun at her [Harriet's] allusions. He found her lingo strange ...and hoped she would stop it because he wanted to talk about baseball. (26)

ここで、アメリカにおいては、実用的で恩恵を目に見える形でもたらず教育が特に望まれ (Commager 10)、知識のための知識の取得は否定される傾向にある事実 (Hofstadter 30) を思い起こしたい。一攫千金の可能性を秘めた野球の世界において効用を発揮する教育のみを受けたロイは、やはり、アメリカの主潮的価値観に即応した人物といえる。以上のとおり、視覚によって行動様式が何にも増して決定されるロイは、他方で、純アメリカ的価値観と調和した人物としても描かれている。

他方、アイリスは他者が彼女に向ける視線を意識することなく、私生児の養育に全霊を傾注している。娘との精神的絆こそを彼女は至高視している (204)。つまり、アイリスは、ロイの具象志向とは対極の価値観を有している。私生児の娘の養育に半生を捧げたアイリスは、“‘Except for my baby I was nearly always alone, reading, mostly, to improve myself...’” (204)。という生涯を送っており、その結果、“minimal experience in the world” (Alter 95) しか経験していない。このような、アメリカ社会との関与の度合が著しく低いアイリスは、“‘Suffering is what brings us toward happiness... It teaches us to want the right things’” (152)。と述べ、苦悩の肯定的側面を強調する。このような思考様式は、苦悩の中に啓示を見出す、以下の引用に見られるユダヤ的思考様式と軌を一にしている。

Among the Hebrews, every new historical calamity was regarded as a punishment inflicted by Yahweh, angered by the orgy of sin... No military disaster seemed absurd, no suffering was vain, for, beyond the “event,” it was always possible to perceive the will of Yahweh. (Eliade 102-3)

あるいは、男性の名誉欲を否定する点で、アイリスは Hebraism と同根であるとの指摘も見られる (小林 158)。そうであるならば、本作においては、アイリスに見られる具象志向の不在がユダヤ的価値観と連動し、ロイと不可分な具象志向が純アメリカ性 (非ユダヤ性) と連動する作品構造が見

られる。このような作品構造は、マラマッドの他作品にも見出せる。

II

本章においては、*The Assistant* における各登場人物の行動の指針を考察したい。まず、Morris Bober の経営する食料品店であるが、21 年間、その店の外見は殆ど変わらず、看板が失われた状態も 10 年間放置され (4-5)、店の窓に埃が付着した状態も手付かずのままになっている (40)。モリスは店内の視覚的な乱雑さや汚濁にも完全に無頓着である (56)。さらに、モリスは、散髪が必要な状態にある彼の頭髪も放置し続けている (125)。つまり、他者の視線が下す評価に対するモリスの徹底した無関心を指摘できる。モリスが周囲の人々の生活状況に関して判断を下すのも、現前に何も存在しない状況においてであり、視覚情報に基づいてではない (7)。モリスは視覚情報を重視しない点で一貫性を有する。

以上のようなモリスも、視覚情報に囚われる例外的場面が数箇所出てくる。例えば、ドイツ人が新規開店した、モリスの店の売上に大打撃を与えるのが必定の食料品店の外見にモリスの意識は完全に囚われる (11)。その際のモリスは、非生産性、自虐性、退行性が際立った人物と墮す。あるいは、モリスは、既出のドイツ人の店の後継者となったノルウェー人の配布したピラの記載内容のある日の午前中、間断なく眺めており (169)、その際も、彼は明らかに視覚情報に囚われている。この場面のモリスの行動も、再び退行性が際立った非生産的なものとなっている。これらの描写は、視覚情報に依存して現実に対処するのが、モリスの本分ではない事実を伝えている。そのようなモリスは、葬儀の際の導師の弔辞を通して、典型的ユダヤ人として位置付けられている (229-30)。あるいは、Frank Alpine、Ward Minogue の対ユダヤ人偏見を通して (26, 70, 88, 157)、モリスにはユダヤ人としての色彩が色濃く投影されている。

次いで、モリスの娘 Helen の行動パターンに注目すると、彼女が物品を目にした際に注目するのは外面ではなく、その表面下に潜在している抽象的意義である (131)。同様に、ヘレンは、交遊相手となるフランクの外見の奥に潜んでいる内面性を読み取ろうと努力する (121)。彼女が人生に対して希求する対象も、“a larger and better life,” “Education,” “prospects” (43) といった抽象的事象であり、視覚で捕捉できない点で一貫性がある。その一方で、フランクは恋人、将来の結婚相手と想定しつつヘレンと接することが多い。そのため、ヘレンがユダヤ人である事実が二人の将来に及ぼす影響をフランクは懸念し続ける。その結果、フランクの意識を通して、ユダヤ人としての色彩が再三、ヘレンに対して投射されることになる (61, 63, 89, 118)。

以上に確認できた、モリスとヘレンが共有する、視覚情報を重視しない生活様式は、フランクの生き方と鮮明な対照関係にある。この点を確認するために、フランクの行動様式を考察したい。まず、物干しに掛っているヘレンの下着が、ヘレンにまつわる思念をフランクに想起させる (60-61)。つ

まり、フランクの脳裏において、ヘレンに関する思索と視覚情報とは連動している。他にも、ヘレンの外見を詳細に観察し (61)、視覚によって捉えたヘレンの容姿の記憶を脳裏において執拗に反芻し、そこに定着させようとするフランクの姿勢がある (66)。さらに、ヘレンの容姿を目視すること自体へのフランクの執着心の強さも強調されている (62-64)。これらの在り方からも、彼女に関する視覚情報に対する、彼の執着の格別の強さが読み取れる。ヘレン以外の女性に関しても、フランクが女性と接する際には、体型、体の起伏の有様などの外貌に着目している (100)。さらには、ヘレンを目視することへの渴望が、ヘレンに対する虚偽の発言や (64-66)、ヘレンの入浴の覗き見といったフランクの行動を誘発する (75)。フランクに潜在する反倫理性を視覚情報への渴望が始動させている。数秒間の入浴の覗き見の際にも、フランクはヘレンの裸体を細かく分析し、覗き見を終えた後にフランクは、“a moving joy” (76) を覚えており、やはり、視覚情報はフランクに対して極めて重大な意義を有するものとして描かれている。

フランクがヘレンの関心を引きたい際に手段として活用するのは、金の縫込み入りのスカーフと皮装の本である。それらの包装には、フランクの手によってリボンが結ばれている (111)。彼は、事物の視覚的効用を利用してヘレンの関心を喚起しようとしている。ここには、情愛を視覚に訴える贈答品の形で形象化することに執着するフランクの姿もある (119)。全く同一のフランクの思考様式が表出したものとして、悲しみから背広を作ることができる彼の姿勢を指摘できる (231)。さらにフランクは、視覚に訴える贈答品によって、彼が犯した過ちにより破綻したヘレンとの関係の修復を目指す (192)。また、ヘレンに関するフランクの視覚的な記憶が、彼女に対する彼の行動様式を継続的に決定する (134-35)。フランクと会話を交した直後のヘレンが、視覚情報に囚われる状況に一時的に置かれるのも (202)、フランクの視覚情報偏重の姿勢に感化された結果と考えれば説明がつく。

他にも、フランクは食料品店の外見の改善による集客を目指し (186)、ライバル店の外見を仔細に観察することにより売上を増大させるための着想を得ようとしている (191)。また、フランクが捉えるユダヤ人は、内面性ではなく、外見の特殊性によって他人種、他民族から弁別される。例えば、ヤームルカの着用の有無 (124)、鬚 (191)、耳の分厚さ (157) がフランクにとってのユダヤ人の弁別的要素となっている。対照的に、導師による、モリスのユダヤ人としての identification は、究極的に抽象的な視点を通してなされている (229-30)。

作品終盤においても、ヘレンの生活のためにフランクが行っている苦闘が、彼女との関係の修復という形で報われず、自暴自棄となったフランクは、ヘレンの入浴を二度、覗き見する (242)。さらには、客の視線の方向を観察しては、量り売りの際に代金分よりも少ない分量の商品を渡している (242)。このように、視覚に鋭敏な感応を示す姿勢がフランクの反倫理性を起動させる方向性が最後まで継続している。視覚がフランクの諸行動の極めて重要な起因となっている点には、疑念の

余地がない。

そのような、視覚情報に起因するフランクの反倫理性が根絶された事実が、作者の全知の視点より、“Then one day, for no reason he could give, though the reason felt familiar, he stopped climbing up the air shaft to peek at Helen, and he was honest in the store” (242). という形で突然、指摘される。視覚情報の呪縛から開放されたフランクに相応しく、フランクのヘレンに対する愛は、視覚に基づいて把握できる現実の一状況ではなく、フランクの脳裏にのみ存在する、聖フランシスのイメージに依拠した心象風景を通して把握されたものに変化する (245-46)。作品当初とは異なり、意識によって生成された心象風景の方が、視覚情報以上に、現実を正確に表現するという視点をフランクは獲得している。その直後に、フランクは割礼を通じてユダヤ人へと変身する。つまり、視覚情報に依存しないモリスとヘレンの、ユダヤ性が強調されていたあり方と精密に調和したフランクの内面的変化が導入されている。

副次的登場人物に目を向けると、Julius Karp は抽象的事象を具象物の比喻を通して認識し続ける (149, 150)。加えて、彼は、不幸すらも視覚的な計量化が可能な存在として認識する (150)。さらに、物品を何であれ希望するだけ保有できることが、ヘレンが彼の息子 Louis と結婚することの利点として、カープに認識されている (152)。その上、カープは過去において、雇用主の視覚が不自由なことに付け込んで彼から詐取した経験を持つ (150)。次にルイスに目を向けると、彼は、雑誌の掲載写真の影響を受けて髪形を変えている (41)。このように、視覚情報によって彼の生活様式は左右されている。また、ルイスが人生に希求するものは現在持っている「事物」と同等の存在である (43)。このように、彼は視覚情報を重視する点で、父親と軌を一にしている。以上のようなカープ (父) は、モリスとの人間関係について思索する際に、モリスをユダヤ人として認識している (149)。このような、カープによるモリスの位置付けが生じるのは、カープ自身が、自らはユダヤ人の範疇に属さないという自意識を確固として保持しているからである。つまり、カープは現実にはユダヤ人でありながら、彼の特異な自意識の描写を通して、作中においてユダヤ人の範疇から除外されている。

以上のとおり、『アシスタント』の登場人物の行状を整理すると、ユダヤ性と視覚情報への無関心とが連動し、他方、視覚情報への拘泥と非ユダヤ性とが不可分の関係に置かれる作品構造が指摘できる。このような二分法の維持に心を砕く作者の姿が指摘できるのである。この姿勢は、『ナチュラル』において、視覚情報に固執するロイを、純アメリカ的 (非ユダヤ的) 存在として描き、視覚情報に無頓着なアイリスをユダヤ的色調と共に描いていた作者の姿と照応している。以上のような構造を共有する作品は他にもある。

III

A New Life における Seymour Levin は、彼が遭遇する現実の諸相を、視覚的要素や具体性を究極的に欠いた抽象的表現によって認識する傾向が強い。例えば、レヴィンの視点から、かつてアルコール依存症であった彼とレポート提出の際に剽窃を行ったことが疑われる学生との関係は、“the reformed judging the unreformed” (169) という抽象表現で伝えられる。同様に、いかに警戒しようとも過誤を犯しがちな彼の状況は、“‘ I am one who creates his own peril ’” (58). と表現されている。また、全知の視点から客観的に描かれた作品舞台 Eastchester の自然は、以下のとおり描かれている。

White birches stood in baths of tiny yellow leaves. Elms had golden hair and naked black bodies. Chestnut trees in strong sunlight wore orange impasto. Vine maples, the only adventures, flared yellow, red, and purple around green at the core. In the setting sun maples turned bronze, and oaks red. (123)

色彩語が多く登場し、視覚的な美しさを強調する描写となっている。ところが、レヴィンの主観を通して自然が眺められるや、自然が有する形而上的な意味合いが抽象的な単語によって伝えられ、視覚的な美しさに着目する視点は、以下のとおり消失する。

Levin rejoiced at the unexpected weather, his pleasure was tempered by a touch of habitual sadness at the relentless rhythm of nature; change ordained by a force that produced, whether he wanted it or not, today’s spring, tomorrow’s frost, age, death, yet no man’s accomplishment; change that wasn’t change, in cycles eternal sameness, a repetition he was part of, so how win freedom in and from self? (195)

以上のとおり、視覚情報を通しての現実の把握を回避する姿勢こそが、レヴィンの現実認識の本質といえる。

視覚情報に基づいて行動する姿勢をレヴィンが忌避する事実も、同僚 C.D.Fabrikant へのレヴィンの対応から読み取れる。まず、次期学科長の候補者ファブリカントを長らく支持し続けた後に、その支持をレヴィンは突然撤回する。このようなレヴィンの転換が生じたのは、解職の瀬戸際に立たされた Leo Duffy (レヴィンの前任教員) への支援をファブリカントが撤回した理由を彼が知ったためである。その理由とは、英作文主任 Gerald Gilley によって撮影された、Pauline (ギリーの妻) とダフィの海岸での全裸の写真を見せられたファブリカントが、その写真を二人の間に姦通関

係があった証拠として無条件に認定した事実である。視覚情報に基づいて重大な決断を行った彼の姿勢を、レヴィンは糾弾している。この事実は、写真から伝えられる視覚情報の曖昧性を、レヴィンがファブリカントに力説している下記の箇所から最も明確に読み取れる。

“I mean, could I ask whether you gave Duffy the benefit of a reasonable doubt—for instance that he might just have happened to go swimming in the nude with a woman—let’s say on impulse—hers—and otherwise the relationship might have been perfectly innocent? It’s possible.” (298)

他方、ファブリカントは、病的な非社交性、極端な臆病さといった人格的瑕疵を有するものの、それらの問題点を視覚メディア（写真）に信頼を寄せる彼の姿勢ほどには、レヴィンは問題視しない。さらには、ファブリカントがダフィの支援を中止した事実自体には、さほどの義憤をレヴィンは覚えない。ダフィが、レヴィンが信奉するヒューマニズムやリベラリズムを体現した人物である事実を踏まえると、これは、レヴィンの所信と調和しない姿勢といえる。しかも、ファブリカントの支援を中止した後の次善策は、新任教員のレヴィン自身が学科長に立候補するという、極めて非現実的なものである。視覚メディアに信頼を寄せる姿勢に対する拒絶反応が、レヴィンの価値体系の頂点に位置していることが、上記から指摘できる。

以上のレヴィンのあり方は、姦通関係に陥った後のポーリーンに対する彼の見方と調和している。具体的には、レヴィンは、ポーリーンの女性としての外面的な瑕疵を、“Five minutes ago in pants, uncombed hair, flat chest, she had all the appeal of a pine board” (126).、あるいは、“Her chest had the topography of an ironing board” (193). といった形で、仔細に観察し続ける。レヴィンは、姦通相手に対して向けるには極めて奇矯な、ポーリーンの外見に対する視座を露にする。しかし、このあり方も、レヴィンのポーリーンに対する愛着が、視覚情報（肉体美）とは無関係に生起している事実を確認するための行動と解釈すれば、合理的に説明がつく。レヴィンはポーリーンの外見の美しさに魅了されて恋人関係に陥ったのではない点を確認しているのだ。レヴィンは、視覚情報の超越を目指す人間といえる。

他方、レヴィンとは対照的に、ギリは写真への執着が強い。彼は常にカメラを自家用車に搭載し、周囲の人々の撮影を頻繁に行い、学問ではなく野球の写真に関して同僚と議論をする。彼の作中での最後の発言も“‘Got your picture!’” (367) である。このような、彼の視覚情報の重視は、彼の教育観とも通底している。まず、ギリは文学畑の出であるが、文学教育以上に、作文の教授に価値を見出す。その理由として彼は、“see these kids improving their writing” (21) というあり方が容易である点と、“‘It isn’t easy to notice much of a development of literary taste in a year’” (21). とい

う状況を挙げている。さらに、ギリーは、学生の試験の点数と、クラスごとの平均点とを、視覚に訴えるグラフに置換することを好んでいる。つまり、ギリーは、通常は視覚的に把握できないはずの、学習における学生の進歩を、視覚的な媒介物を通して把握しようとしている。当然ながら、彼が作成中のアメリカ文学の研究書は、写真によって主に構成されている。彼は、学生の興味の所在を、“‘I thought the students would want to see what some of our writers looked like, the houses they lived in and such’” (31). と捉えているからだ。ギリーは数の多さを表現する際にも、“‘For next year I already have a pile of applications half a foot high’” (9). と述べ、視覚的な表現に訴える。このように、ギリーは現実を把握する際に、視覚情報に依存する傾向が極めて強く、逆に抽象的事象には価値を認めない。ギリーの視点からは、抽象的事象であるはずの愛すらも、視覚的、具象的に把握される対象となる (356)。

本作には、冗長な発言を行う副次的登場人物が多い。この設定に対して、Richard Astro は、“[T]he detail in which it is presented draws attention away from the novel’s major themes” (151). と批判している。しかしながら、それらの冗漫な発言の多くは、視覚に基づいて、状況を正確に説明しようと腐心した結果であることが多い。例えばフェアチャイルドの冗漫な発言は、“‘He [Duffy] was a handsome man in his way, with a wild head of Irish hair, intense eyes and a prominent jaw. He gave the impression of being thin and loose-jointed, maybe he was’” (42). というものだ。ファブリカントの姉妹の発言は、“‘I remember seeing pictures of bread lines in New York, hungry men, some with coats, some without ’em or even a hat, standing in the snow for a doughnut and coffee’” (67). と展開する。つまり、土着の人々の発言は視覚情報に依拠して展開する傾向が顕著であり、ギリーの発言との類縁性を有している。加えて、地域住民が遍くスポーツ観戦に熱狂する様子も強調されている。このような、地元民に最も好まれる娯楽は、レヴィンを含む大多数が望遠鏡をスポーツ観戦に携える事実象徴されるとおり、視覚に大きく依存している。作者は、地域住民を支配している感性の統一の維持に余念がない。

以上のように眺めると、レヴィンとギリーの対立関係の本質は、視覚情報を重視すべきか否かに関する意見の相違に収斂される。レヴィンは研究や教育の成果を視覚情報で明示できない文学を軽視するギリーを疎んじ、ギリーは自然の美に無頓着なレヴィンを嘆くのだ。視覚情報への評価姿勢に端を発する対立関係が、作中の重要な人間関係のあり方を左右している。

ここで注目したいのは、Leslie Fiedler が、レヴィンが住む西部の田園地域の人々は、レヴィンがユダヤ系である事実に対して潜在的な悪意を有している点を、“Or maybe the identification of Levin as an ‘urban Easterner’ is intended to say it all since that phrase in such a Western small town as Levin inhabits is often a euphemism for ‘Jew,’ when not for ‘Jew bastard’” (157). という形で、鋭敏に指摘している点だ。フィドラーの指摘を裏付ける具体的事象を作中に探すと、ギリーはレヴィンに

対して、“‘No more New Yorkers, goddammit’” (291)、あるいは、“‘Listen, Levin, why don’t you go back where you came from—to the stinking goddamn New York subways?’” (310) と面罵している。ここで、Nathan Glazer らが、ユダヤ人とニューヨークとの親和性を、“New York is the headquarters of the Jewish group. The euphemistic use of the term ‘New Yorker’ to refer to ‘Jew,’ which is not uncommon in the United States, is thus based on some reality” (138). と指摘している点を思い出したい。この点を考慮すれば、ニューヨークに対するギリリーの徹底した唾棄は、ユダヤ人に対する彼の嫌悪感の間接的な表白とも解釈できる。加えて、学科長 Orville Fairchild (ギリリーの分身的存在) が新任のレヴィンを同僚に紹介する際に口にする、“‘... Mr. Seymour Levin, a native of New York City, New York; B.A. from New York University, New York ...’” (94). という、過大な反復表現の中にも、ユダヤ人への偏見を嗅ぎ取ることが可能となる。

イースチェスターにおける、対ユダヤ人の反感は他の形でも指摘できる。同じくギリリーと価値観を共有する地元民 George Bullock は、*New York Times* に関して、“‘I have nothing against the guy even if he does talk like the *New York Times* ...’” (119). と述べ、否定的なニュアンスと共に話題にしている。ここで、*New York Times* が、“Jewish-owned” (Higham 190) と冠される事実を思い出したい。そうであるならば、ギリリー、フェアチャイルド、パロックが共にユダヤ人に対して嫌悪感を示す傾向にあることが、極めて不分明な形ではあるが示唆されている。つまり、イースチェスターの精神風土が、反ユダヤ的傾向を内包している点を暗示せんとする作者の姿勢を指摘できる。繰り返すと、レヴィンとイースチェスターの地元民との間に見られる差異の本質は、視覚情報を重視するか否かに存していた。そうであるならば、ユダヤ系のレヴィンを視覚情報に囚われない人物、非ユダヤ系人物を視覚情報に拘泥する人々として弁別的に描く二分法を本作も採用しているのである。

IV

以上に確認できた長編小説の作品構造は、複数の短編小説にも相似形が見出せる。例えば、“The Lady of the Lake” において、旅先で知り合った女性 Isabella della Seta を目視することへの渴望が、Henry Levin を極めて強く支配する (124)。そのため、イザベラの裸体を見損なったことがレヴィンに最大級の落胆をもたらす (124)。彼は、彼女の容姿を微細に観察 (112, 121, 125) するに留まらず、彼女の洋服が着古されていることにさえ敏感に注目する (130)。加えて、イザベラの視線が彼から逸れていることにレヴィンは落胆を覚え (127)、他者の視線の方向性にも過敏な反応を示す。彼女と初対面の際に、レヴィンは自己の外貌を脳裏で反芻し、彼の容姿がイザベラの目にどのように映っているかという点 (112) や、彼が外見的にユダヤ人を想起させない事実 (113, 115) にも異常に拘泥する。加えて、レヴィンの不器用な水泳の様子をイザベラに目視されることや

(124)、全裸での水泳の際にイザベラに割礼を見られること (128) に対する彼の懸念も描写されている。このように、視覚情報に囚われる傾向こそが、レヴィンの大きな特徴といえる。

そのレヴィンは、彼がユダヤ人である事実を韜晦し、非ユダヤ系の名前を騙ってイザベラと接する。加えて、彼は、“a Jew’s inheritance” と位置付けられる “the suffering” の受容も拒否している (Solotaroff 61)。このように、レヴィンは二重の次元で、彼がユダヤ人である現実から逃避している。以上の設定を通して、視覚情報に行動が呪縛されたレヴィンは、『アシスタント』におけるカープと同様に、ユダヤ人の範疇から除外されている。他方、イザベラが至高視するのは “My past” (132) や “what I [Isabella] suffered for” (132) といった抽象的事象である。その彼女は、ユダヤ人である事実が招来した災禍を象徴する、自己の肉体に残された傷跡 (刺青) を重んじている。当然、彼女にとって重要なのは、傷跡が持つ象徴性であり、傷の外貌自体が意義を有するのではない。そのような、視覚情報に囚われることが絶無の彼女は、結婚相手を、ユダヤ人としての彼女の過去を共有できるユダヤ人に限定しており、レヴィンとは正反対に、ユダヤ人としての自意識が極めて強固なのである。

“The First Seven Years” において、靴屋の店主 Feld は勉学に勤しむ若者 Max に、娘 Miriam との外出を勧める。その際に、マックスはフェルドによる口頭でのミリアムの容姿の説明のみでは納得せず、写真で外見を確認して初めて外出に合意する (6)。加えて、マックスはフェルドに修理を依頼した靴の外見にも異常に拘泥する (12)。彼も、視覚情報を偏重する傾向が強い。フェルドに目を移すと、彼は教育を重視するが、それは教育から目に見える形での実りが期待できる限りにおいてである (11)。この点で、彼はマックスと価値観を共有している。他方、彼とは対照的に、フェルドの店の助手 Sobel にとっては古典文学が最高の価値を有し、給金の多寡は彼の関心の埒外にあり、彼の部屋にある家具は “a narrow cot, a low table” (13) のみである。かような、視覚的に把握可能な事物に無関心なソベルに関しては、“by the skin of his teeth escaped Hitler’s incinerators” (15) という描写が見られ、彼がユダヤ人固有の歴史の中に組み込まれている事実が強調されている。他方、フェルドとマックスに関しては、同じユダヤ人でありながら、そのような描写はない。やはり、既出の作品群に確認できた作品構造の再来を認めるのである。

また、ソベル (抽象志向) はフェルド (具象志向) に対して、“the moral advantage” (Bilik 61) を保持している様子が描かれている。加えて、マックスは、ミリアムの視点から物質主義者として完膚なきまで酷評される一方で (11)、ソベルは彼女の敬愛の対象となっている (8)。つまり、明確な優劣関係が二つの対照的な姿勢の間に設けられている。類似した構成を有する短編は他にもある。

“Angel Levine” において、Levine が黒人である事実と彼が羽を欠く点とが原因となって (47)、彼が天使であるとのレヴィンの主張を、Manishevitz は決して受け入れられない。レヴィンはマニシュヴィッツの眼前に忽然と姿を現し (45)、同じく忽然と姿が消え (48)、彼が天使である事実を示

唆する状況があっても、視覚情報に囚われたマニシュヴィッツはレヴィンが天使であると確信できない。その間、彼は様々な厄災に苦しみ続ける。しかしながら、マニシュヴィッツが、肌の色や羽の有無といった視覚情報を超越して、レヴィンが天使であると確信した直後に、天使が引き起こした奇跡による救済がマニシュヴィッツに訪れる。本作品は、視覚情報に囚われる姿勢が事態の改善の障壁となる過程を描いており、視覚情報のみに拘泥して判断を下す姿勢の不十分さを主題としている。同様の主題を有する短編は他にもある。

“The Silver Crown”において Albert Gans は父の病の治癒を目指して、病気を治癒する力を持つとユダヤ教の導師が力説する銀冠を、その導師から購入する。購入の決断が最終的に下されるのは、鏡に映った導師の頭に銀冠が輝いているのをガンスが視覚的に確認できた直後である。ガンスは、視覚によって得られた情報により、真贋、効能が見抜けるという強い信念を持っているからだ (9, 16)。しかしながら、高額を支払いを完了した後に、鏡に投影された銀冠が実体を伴っていなかったことを確信した彼は、詐欺に逢ったと後悔する (22)。直接、実物を目視できなかった事実が、そのようなガンスの感情を喚起するのだ。詐欺に遭ったと確信した状態で導師を問い詰めるガンスに対して、導師は、冠の効能を伝える、銀冠により病が治癒した人々からの手紙を披露する。しかし、ガンスは納得せず、実物の直接の目視にあくまでも執着する (28)。このように、ガンスは視覚情報に過剰に囚われ、それによって行動の方向性が強く左右されている。

大金を投じて購入した冠を目視したいというガンスの焦燥感は、彼が命を救おうと尽力しているはずの父親に対するガンスの冒瀆的発言を誘発する。その直後には、“An hour later the elder Gans shut his eyes and expired” (29). という記述が続く。そのため、偶然の符合を導入することにより、ガンスの視覚情報に完全に囚われた姿勢が、結果として、父親の死を招いたというイメージを読者に想起させる作品構成が導入されている。つまり、視覚に過度に囚われた姿勢を否定するマラマッドを再確認できる。対照的に、ラビはユダヤ教の視点から、視覚情報に全幅の信頼を寄せないことに価値を見出している (27)。この描写の挿入により、やはり、ガンスの姿勢は非ユダヤ的性向と位置付けられることになる。

“The Girl of My Dreams”における 作家志望の Mitka は文通を Olga と開始する。会ったことがない文通相手を想像する際のミトカは、相手の内面性ではなく、外見的特徴にのみ焦点を当てる (34-35)。その結果、オルガと初対面の際に、彼女が “marvelously plain” (36) である事実を知ったミトカの反応は “[A] monstrous insight tore at his scalp . . .” (36). となる。本作においても、オルガの外見的特徴に対する評価が完全にミトカの感情を支配する様子が描かれている。オルガが提供する、“The inspirational nourishment” (Solotaroff 63) という抽象的事象に対する評価が不可能である点が、ミトカの強烈な幻滅を招来するあり方が描かれている。再び、視覚情報に過度に依存する姿勢の不備が描かれている。

“Rembrandt’s Hat” においては、Rubin が着用した帽子に対して、レンブラントの帽子と類似しているとの印象を Arkin が指摘したことが発端となって (129)、二人の間に敵対関係が生じる。視覚に基づいた、アーキンの不用意な指摘が、ルービンの感情を害してしまう (133)。その後、アーキンが学生から誕生祝として贈られた帽子を被っている様子を偶然、ルービンは目撃し、ルービンはその帽子の着用を自分に対する当て付けと誤解する。怒りに駆られたルービンは、その帽子を所有者アーキンから無断で持ち去る。その結果、二人の対立関係の決定的な深刻化が生じる。このような最中に、アーキンのレンブラント絡みの指摘が、なにゆえにルービンの感情をかくも悪化させたのかをアーキンは推測し、納得のいく理由に考え至っている (139)。視覚のみに依存して安易に判断を下す姿勢が、人間関係の無用な劣化を招く事実をアーキンが認識するに至る過程が本作では描かれている。

“The Magic Barrel” において、作品当初の Leo Finkle は、結婚相手を選択するに当たって、女性の容色を重要な採否の基準としている。この点は、紹介される女性が若いかな否か、魅力的かな否か (197-98)、彼女らの四肢の健康状態 (198-99) などに対する彼の関心の強さから分る。そのようなリオに変化が生じ、彼は女性を外見のみで評価するのを止める (209)。具体的には、ある女性の写真の背後に読み取れた生活のあり方、善の要素がリオを魅了するに至り、女性の選択に際しての彼の姿勢が大きく変化する。リオが写真の背後に読み取った抽象的事象は、忌避していた Pinye Salzman の元に彼を即座に出向かせるほどの衝動を彼に喚起している。他方、本作をリオが内面的に成長する過程を描いた作品と見る点で、批評家の評価は一致している。例えば、“Neither Salzman nor Finkle understands love: Finkle learns about it through suffering . . .” (Abramson 133). という指摘の他にも、本作をリオの “maturation” (Richman 118) の物語と解釈する見方がある。作品終末部のリオの世界観は、確認したとおり、外面的容姿への固執から完全に開放されていた。つまり、視覚による呪縛からの脱却がリオの成長の重要な一局面として設定されている。以上のとおり、視覚情報に囚われた状況からの解放を肯定的に描いた短編小説が、マラマッド文学には複数見受けられる。ただ、短編 “Black Is My Favorite Color” において、色彩語がタイトルにおいて多大な存在感を有している事実は、既出の議論とは相容れない印象を与える。しかしながら、その単語はあくまで黒人を象徴する比喩的な意味合いを伝えることを主眼として選択されており (18)、視覚的な意味合いは極めて微弱なのである。

V

以上に確認できたとおり、マラマッド文学においては、視覚情報の価値を矮小化して捉える傾向が全体的に極めて顕著といえる。本章においては、そのような作家的特質が作者の民族的背景とどのように連動しているかを考察したい。この点を明確化するに当たって、最初に、アメリカ人は五

感で把握することができない抽象的存在に価値を置かず、視覚によって把握可能な具象物に価値を認める傾向が強い事実に注目したい。例えば、“American success must be recognized success. . . . Success must be not only measurable, but observed, recorded, applauded and envied” (Perry 10). という指摘がある。同様な叙述として、アメリカ人にとっては、物品を購入して、初めて金銭は価値を持つという解釈 (Robertson 187-88) もある。さらには、金銭、収入はアメリカ人にとっての成功の尺度だが、人目につく物品の購入によってのみ、成功を示すことが可能と考える、“[I]ncreasing number of Americans have measured individual worth . . . by the goods and services they are able to consume” (Robertson 189). という観察もある。その他にも、アメリカ人にとっては住宅が成功の度合いを表現するという素描もあれば (Moore 52)、達成したことの目視にアメリカ人が拘る点を指摘した、“[A]chievement has to be visible and measurable . . .” (Stewart 79). など、成功の指標を具体物に認めがちなアメリカ人の国民性の記述は枚挙に暇がない。加えて、家財が人間を他者から独立させ、自由にするという発想もアメリカ人は有している (Critoph 28)。アメリカ人が一般的に至高視している自由と独立の実現も、具体物の存在が前提になるという視点をアメリカ人は有している。視覚的に把握できる具体物の重視は、アメリカ人自身によって確固として自覚された、アメリカ人の一般的国民性と位置づけることが可能である。

以上に確認できたアメリカ人の一般的姿勢と、ユダヤ人の間で一般的な価値観とを対比したい。まず、ユダヤ人に関する以下の素描に注目してみよう。

The primary product of Jewish creativity that seems to merit public exhibition is a book. . . . [I]t is a book that has become the primary symbol and vehicle of Jewish self-expression. . . . In contrast to the cultures of other peoples, the dominant medium through which the Jewish cultural impulse seems to have sought and found expression has not been tactile, tangible matter — marble, steel, wood, color — but the word. . . . Though Jews rarely attempted to reproduce the glories of nature on canvas, they described them in word pictures. . . . [T]he fact remains that the Jew has expressed himself mainly through the word. . . . [T]he word has been his primary instrument in attempting to penetrate and respond to the mystery of life and man’s place in the world. (Jospe 37-41)

上記引用においては、ユダヤ人が自己表現の手段として至高視した媒体が文字と書物であり、大理石、鉄、木、色、キャンバスなどの視覚に直接訴えかける媒体を用いて自らの文化を表現する姿勢を欠く点が指摘されている。同様の指摘は、下記のとおり他にもある。

The Jew was rarely satisfied with the things that can be seen or felt or heard or touched or analyzed in the glass tubes of the laboratory. He wanted to grasp the invisible behind the visible, the idea behind the phenomenon, the whole behind the parts, the law behind the sequence of facts, the meaning and purpose beneath the surface, the reason why things are the way they are. (Jospe 42-43)

上記によると、ユダヤ人は、視覚で把握できる状況の背後にある、視覚では把握できない状況を掴もうとする点に特徴があるという。同様に、“Judaism opposes . . . materialism. . . [Materialism] declares that the only being is the being of the material world; the being of man and the being of God are reduced to the being of matter” (Vogel 116-17). という指摘も、ユダヤ人が具象物を通して現実を把握する姿勢と相容れない傾向を有する点を明示している。

同一歩調をとる形で、“We [Jews] have neither built great physical structures nor excelled in the graphic arts” (Lelyveld 178). という、視覚に訴えるタイプの美術の創出がユダヤ人の間では低調であることを指摘する声もある。これらが例外的なユダヤ人の素描ではない点は、“. . . Jews were not notable for their work in the plastic arts” (Meyers 45). といった指摘や、“the striking poverty of plastic and graphic art in Jewish history” (Schwarzchild 2) を指摘する声から明らかである。

さらにユダヤ教の特徴に目を向けると、ユダヤ人の神に関する信念は時代の経過と共に変化すれども、“God’s . . . invisibility” に関する “overarching assumption” は不変であるという (Ariel 18)。また、“the Jewish belief in God” は “a daring suspension of belief in idols” を要求するという (Ariel 17)。以上の指摘から読み取れる、ユダヤ教の神が、視覚で把握が可能な具象物の形態を取らない抽象的存在である事実は、以下の引用においても強調されている。

Judaism is a religion of history, a religion of time. The God of Israel was not found primarily in the facts of nature. He spoke through events in history. While the deities of other peoples were associated with places or things, the God of the prophets was the God of events: the Redeemer from slavery, the Revealer of the Torah, manifesting Himself in events of history rather than in things or places. (Heschel 200)

ユダヤ人にとっての神の意味合いは、“It is difficult to imagine Jewish identity without a belief in God” (Ariel 11). と評価される。あるいは、“worship of God” が、ユダヤ人を特徴づける三大性向の一つとされる (Heilman 17)。そのような、ユダヤ人にとって重大な意義を持つ神の位置付けにおいても、視覚情報を否定する姿勢と抽象志向とが顕著である。以上のとおり、複数の文化論を対置す

ることにより、ユダヤ系の間で顕著な抽象物志向と、一般的アメリカ人の中で顕著な具象物志向とが、明確な衝突関係を形成している事実が判明するのである。

Conclusion

再確認すると、マラマッド文学において、ユダヤ的色彩が相対的に濃厚な登場人物は、視覚では把握できない抽象的事象に価値を見出す傾向が強かった。対照的に、非ユダヤ的色彩が相対的に濃厚な登場人物は、視覚で把握できる具象物を根拠に判断を下す傾向が強かった。そうであるならば、以上の、マラマッド文学に指摘できた全体的構造は、ユダヤ人が視覚情報を軽視する現実を極めて精確に反映したものと位置付けることが可能である。ここにおいて、非ユダヤ人からユダヤ人を弁別する、現実のユダヤ人を特徴付ける基本的行動様式を強く意識しつつ、マラマッドが創作活動を行っていた事実が判明する。マラマッドの作品群は、自己のユダヤ人としての *identity* の確認作業としての側面を有しているのだ。加えて、マラマッドは視覚情報に基づいて行動の方向性を決定する姿勢を否定的に描く傾向が強く、逆に、視覚情報に囚われずに決断を下す姿勢を肯定する傾向が認められた。すなわち、マラマッド文学においては、視覚情報に囚われない姿勢を、視覚情報に行動が支配させる生き方に勝る存在様式として描く傾向が顕著であった。この点で、ユダヤ人が過去から継承している精神的遺産の再評価をマラマッドは作中で展開しているともいえる。マラマッド文学全体を視座に入れることにより、マラマッドが、ユダヤ系が安易な *Americanization* に流される方向性を批判的に眺めている点も判明するのである。マラマッドのユダヤ人としての自意識は、マラマッド文学に偏在する全体的構造を生成するほどに強固であったといえるのである。

Works Cited

- Abramson, Edward. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne, 1993.
- Alter, Iska. *The Good Man's Dilemma: Social Criticism in the Fiction of Bernard Malamud*. New York: AMS Press, 1981.
- Ariel, David. *What Do Jews Believe?: The Spiritual Foundations of Judaism*. New York: Schocken Books, 1995.
- Astro, Richard. "In the Heart of the Valley: Bernard Malamud's *A New Life*." *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*. Ed. Leslie Field and Joyce Field. New Jersey: Prentice-Hall, 1975. 143-55.
- Bilik, Dorothy. *Immigrant-Survivors: Post-Holocaust Consciousness in Recent Jewish American Fiction*. Connecticut: Wesleyan UP, 1981.
- Commager, Henry Steele. *The American Mind*. New Haven: Yale UP, 1950.

- Critoph, Gerald. "The American Quest for Affluence." *American Character and Culture in a Changing World: Some Twentieth-Century Perspectives*. Ed. John Hague. Connecticut: Greenwood Press, 1979. 27-50.
- Eliade, Mircea. *The Myth of the Eternal Return, or Cosmos and History*. Trans. Willard R. Trask. Princeton: Princeton UP, 1974.
- Fiedler, Leslie. "The Many Names of S. Levin: An Essay in Genre Criticism." *The Fiction of Bernard Malamud*. Ed. Richard Astro and Jackson Benson. Corvallis: Oregon State U P, 1977. 149-61.
- Glazer, Nathan and Daniel P. Moynihan. *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City*. Massachusetts: M.I.T. Press, 1970.
- Heilman, Samuel C. *Portrait of American Jews: The Last Half of the 20th Century*. Seattle: U of Washington P, 1995.
- Hershinow, Sheldon. *Bernard Malamud*. New York: Frederick Ungar, 1980.
- Heschel, Abraham Joshua. *God in Search of Man: A Philosophy of Judaism*. New York: Meridian Books, 1964.
- Higham, John. *Send These to Me: Jews and Other Immigrants in Urban America*. New York: Atheneum, 1975.
- Hofstadter, Richard. *Anti-Intellectualism in American Life*. New York: Vintage Books, 1963.
- Jospe, Alfred. "On the Meaning of Jewish Culture in Our Time." Jospe 35-50.
— — —, ed. *Tradition and Contemporary Experience: Essays on Jewish Thought and Life*. New York: Schocken, 1970.
- Lelyveld, Arthur. "Judaism as a Source of Social Values." Jospe 176-88.
- Malamud, Bernard. "Angel Levine." *The Magic Barrel*. 43-56.
— — —. *The Assistant*. 1957. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1963.
— — —. "Black Is My Favorite Color." *Idiots First*. 1963. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1986. 17-30.
— — —. "The First Seven Years." *The Magic Barrel*. 3-16.
— — —. "The Girl of My Dreams." *The Magic Barrel*. 27-41.
— — —. "The Lady of the Lake." *The Magic Barrel*. 105-133.
— — —. *The Magic Barrel*. 1958. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.
— — —. "The Magic Barrel." *The Magic Barrel*. 183-91.
— — —. *The Natural*. 1952. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2003.
— — —. *A New Life*. 1961. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970.
— — —. *Rembrandt's Hat*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1973.

---. "Rembrandt's Hat." *Rembrandt's Hat*. 127-41.

---. "The Silver Crown." *Rembrandt's Hat*. 3-29.

Meyers, Williams. "Jews and Photography." *Commentary*. January 2003: 45-48.

Moore, Deborah Dash. *At Home in America: Second Generation New York Jews*. New York: Columbia UP, 1981.

Perry, Ralph. *Characteristically American*. 1949. New York: Books for Libraries Press, 1971.

Richman, Sidney. *Bernard Malamud*. Boston: Twayne, 1966.

Robertson, James. *American Myth, American Reality*. New York: Hill & Wang, 1994.

Schwarzchild, Steven. "Aesthetics." *Contemporary Jewish Religious Thought: Original Essays on Critical Concepts, Movements, and Beliefs*. Ed. Arthur A. Cohen and Paul Mendes-Flohr. New York: Free Press, 1987. 1-6.

Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of Short Fiction*. Boston: Twayne, 1989.

Stewart, Edward. *American Cultural Patterns: A Cross-Cultural Perspective*. Maine: Intercultural Press, 1991.

Vogel, Manfred. "The Jewish Image of Man and Its Relevance for Today." *Jospe* 112-25.

Wasserman, Earl. "The Natural: World Ceres." *Bernard Malamud and the Critics*. Ed. Leslie Field and Joyce Field. New York: New York UP, 1970. 45-65.

小林基. 『虚構のエートス—英米文学覚え書—』 東京: 鷹書房, 1977.